

8201 「いき」とは何か。別言すればそれは・・・

「いき」とは何か。別言すればそれは“エレガンス”elegance だという。が、むしろ根源的には“シック”chic のほうに近いのではないだろうか。その語源はドイツ語の“シック”schick であり、「巧妙」の意である。さらに古くは裁判での見事なほどの詭弁を意味したという。誰の目にも非の打ちどころ一点としてない満足至極の見事さをもじエレガンスとするなら、シックは思いもよらぬ、はっと息をのませる見事さということになろう。

出石尚三『ダンディズムの肖像』

[許容訳例]

*Iki--what is it? Expressed differently, it is said to be “elegance.” Yet isn’t it, rather, basically akin to “chic”? The origin of “chic” is the German *schick*, and the meaning is “cleverness”. In much earlier times, they say, it meant, at a trial, an almost admirably daring sophism. If elegance is an unimpeachably perfect splendor, chic will prove to be an unexpected, breathtaking kind of splendor.*

[翻訳例]

What, exactly, is *iki*? It is often equated with “elegance,” yet surely it is closer, basically, to “chic”? “Chic” derives from the German *schick*, which has the sense of “cleverness” or “dexterity.” Still earlier, apparently, it signified, at a trial, a piece of sophistry that was almost admirable in its daring. If elegance is an effect of utter, flawless perfection, then chic might be seen as an effect that makes one catch one’s breath with its unexpectedness.

■ 「いき」とは何か。(8201)

★ 「いき」は *iki* とするしかありません。特別な言葉であるという意味でイタリックにするといいでしよう。

★ 「「いき」とは何か」は *Iki--what is it?* とか, *What, actually, is iki?* でしょう。この exactly にはほとんど意味はないのですが、「いき、とよくいうけど、いったいどいう意味なんだろう」という感じが出ます。

■ 別言すればそれは“エレガンス”elegance だという。(8201)

★ 「別言すれば、(それは・・・)」は辞書にはありませんが、「言い換えると」に in other words が出てきます。しかし、これは使えません。これを使うと、同じように疑問文で言い換えなければならないからです。他に that is to say がでていますが、これも使えません。to put it (in) another way なら it が何をさしているか曖昧になるので使えます。日本文の表現に一番近いのは expressed differently, (it is said to be...) でしょうが、英語としては普通ではありません、it is often quoted with...の方が英語らしい表現になります。often quoted with の中に「別言すれば」という意味合いが含まれます。

★ 「“エレガンス”elegance」ですが、日本人を対象に書いた文章で、なぜ説明するのに難しい英語の elegance を使ったのでしょうか。女性の服装に対して使われた場合、この言葉が、

「優美」「洗練された」「野暮ったくない」あるいは「しとやか」で大人的な冷たさを伴った意味で使われるとしたら、英語の持つ意味と全く同じです。引用符で囲ってそのまま elegance としておきましょう。

■が、むしろ根源的には“シック”chic のほうに近いのではないだろうか。(8201)

● [が]

[が] は but ですが、yet の方が強くていいと思います。

★「むしろ」は rather ですが、使い方によってはすぐ後の形容詞を修飾することになったりするので配置に注意が必要です。たとえば、rather akin to…となると rather は「むしろ」ではなく「ちょっと…に似ている」となってしまいます。

★「根源的には」は「もともと、根本的には」ですから basically がいいでしょう。

★「“シック”chic」もそのまま“chic”とします。

★「…のほうに近い」は be akin to…とか be close to…が使えます。なお、rather を使わなければ be closer to…です。

★「…のではないだろうか」は Isn't it…?でいいのですが、surely も使えます。この強調の surely は「はっきりした根拠はないけれど、きっと…だ」という場合で。たとえば、Surely he isn't such a fool as to believe that.は「彼はそんなこと信じるほど馬鹿ではないんじゃないかな」と訳すことができます。また、I wonder if it is not closer to…も使うことができます。

■その語源はドイツ語の“シック”schick であり、「巧妙」の意である。(8201)

★「その語源はドイツ語の“シック”schick であり…」のところは曖昧です。「その語源」とは「フランス語 chic の語源」ということであり、「その語源はドイツ語の schick であり、(そのドイツ語 shick の意味は)「巧妙」であった」ということです。the origin is…では意味がよくわからないので the origin of “chic” is…とします。

★「ドイツ語の“シック”schick である」は is “schick” in German でもいいですが、もう少し自然な英語になると、is the German *schick* あるいは、もっと英語らしくすると“Chic” derives from the German *schick* です。

★「「巧妙」」は“cleverness”がいいです。wise が「経験からくる深い賢さ」を表すのに対して clever は「表面的な頭の良さ・巧妙さ」を表し、日本語の「巧妙」に含まれている「ずるい」というニュアンスも含まれていますから。ただ場合によっては「利口；頭の良さ」だけの意味にもなるし、これだけではいくらか物足りなさが感じられるので cleverness or dexterity とするといいと思います。この or は「言い換えると；すなわち」のニュアンスです。なお、辞書で「巧妙」を引くと最初に skill が出てきます。「ずるさ」の意味で使えないこともないのですが、ここで skill だけを使ってもわからないと思います。それに、skill は、どちらかと言うと、褒める場合に使うことが多いからです。たとえば a man of skill (名人・腕利き・熟練者) のように。

★「…の意である」は mean でもいいですが、ちょっと軽いので have the sense of…か、

あるいは signify を使うといいでしょう。

● [り]

「その語源はドイツ語の“シック”schick であり、「巧妙」の意である」の「り」は and でもいいですが、ここは「コンマ+which」の使える典型的な例です。

■さらに古くは裁判での見事なほどの詭弁を意味したという。(8201)

★「さらに古くは」は still earlier か earlier still が日本語に相当します. in much earlier times でも許されますが、どちらかと言うと「ずっと古く」の感じです。

★「裁判での」は at a trial です. これは文末でもいいのですが、最後に出てくると非常に弱くなりますから前の方に置いた方がいいです。

★「見事なほどの詭弁」をそのまま表層的に対応すると almost excellent sophism となりますが、これは自然の英語ではありません. excellent には段階がないので almost は付けないのが普通です. almost を使うとすれば、何か段階を含む形容詞を加えないといけません。日本語の「見事なほどの詭弁」というのは、本当は詭弁に過ぎないとわかっているながらも感心せざるを得ないという意味を含んでいるので、それを強調するような形容詞を加えると almost admirably daring[bold] sophism というように almost が使えます. なお、辞書で「詭弁」を引くと sophistry と sophism が出てきます. sophism でもいいのですが、これは哲学用語の感じが強いので、普通に人がしゃべるような場合には sophistry の方がいいと思われます。

●隠れ連体修飾節の [の]

「見事なほどの詭弁」ですが、この [の] は、しばしば、連体修飾節を端折る場合に使われます. たとえば、「ぼくの車」は「ぼくが所有している車」ですし、「隣りの人」は「隣りに（住んで）いる人」です. ここの「見事なほどの詭弁」は「見事なほどである詭弁」を端折った表現です. したがって、正確に等価変換するには、「連体修飾節（見事なほどである）+ 不定代名詞的体言（詭弁）」として「名詞(a piece of sophistry) + 関係詞節(that was almost admirable in its daring)とつながなければなりません。

★「意味した」は、すでに述べたように、it meant…でもいいのですが、ちょっと弱いので it signified…とします。

★「・・・という」は they say でもおかしくはありませんが、むしろ it seems の方が自然です. また、前にも書きましたが、こういう場合、apparently をよく使います. これは it appears that…（主観連結）と同じです. 日本語の「・・・という」は「・・・と言われている」(they say)より弱いと思うのです. つまり、「・・・と言われている」(they say)には、何となくはつきりした根拠があるわけですが、「・・・という」は根拠があるわけではなく、どこかで読んだとか誰に聞いたということとは関係なく、かなり主観的な見解として使うと思うのです. apparently もそれと同じような感じなのです. たとえば，“Why haven’t they built the new library?” “Apparently the school doesn’t have any money.” と言うと、誰かに聞いたとか、どこかで読んだとかいった意味にはならないのです. ただし、当事者に聞いた

場合もまるで自分の推察のように使えます。たとえば，“Where is Mr. Tanaka today?” “Apparently he's too busy to come.”の場合、これは田中さんに聞いたととった方がいいと思います。

■誰の目にも非の打ちどころ一点としてない満足至極の見事さをもしエレガンスとするなら、シックは思いもよらぬ、はっと息をのませる見事さということになろう。(8201)

★「誰の目にも・・・」は admitted by everyone ですが、「非の打ちどころない」の中に含まれるので強いて訳すには及びません。

★「非の打ちどころ一点としてない満足至極の見事さ」は表層的に対応する表現を辞書から拾って変換すると「誰の目にも非の打ちどころ一点としてない(unimpeachably)満足至極の(perfect)見事さ(splendidness)」となります。 「誰の目にも非の打ちどころ一点としてない(unimpeachably)」には flawless も使うことができます。また「満足至極の(perfect)」には utter も可能です。これらを纏めて utter, flawless perfection とすることが出来ます。なお、splendidness を使うなら splendor を使った方がいいと思います。というのは splendidness というのは the fact of being splendid, つまり、「ただ見事であること」という感じであるのに対して、splendor は splendid effect という意味になります。微妙なのですが、splendor というと放射しているような感じで、その効果(effect)を言っているのです。したがって、使うなら splendidness より splendor の方が日本語の「見事さ」に近いと思います。ただし、こここの「見事さ」は「意識的に効果を狙って、それが非常にうまく成功した」というニュアンスが強く含まれているように感じられます。英語の effect にはその感じが含まれているので、splendor も使わずに an effect of utter, flawless perfection とした方が納得のいく英語になると思われます。このような言葉の微妙な差異はどの言語にもあるもので、たとえば、My mother was sunk into grief. は「母は悲しみに沈んでいた」です。この場合「悲しさ」とは言いません。中島みゆきの歌「時代」の中に「喜び悲しみくり返し／今日は別れた恋人たちも・・・」がありますが、「悲しさ」に置き換えることは出来ません。置き換えるとしたら『嬉しさ悲しさ・・・』でしょう。しかし、そうすると「喜び」や「悲しみ」が概念化されて感じられてしまいます。

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(・・・はっと息をのませる見事さ)

「思いもよらぬ、はっと息をのませる見事さ」も表層的に変換すると「思いもよらぬ(unexpected) はっと息をのませる(breathtaking) 見事さ(kind of splendor)ですが、ここは「連体修飾節(はっと息をのませる)+体言(見事さ)」ですから、英語では「名詞(an effect)+関係詞節(that makes one catch one's breath with…)」とすると日本語に対応します。ついでですが、breathtaking は「あまりにも立派なのでただただ感心してしまった」という感じであるのに対して、makes one catch one's breath(with its unexpectedness)は「ハッとびっくりした」とか「あまりのも立派なので驚いた」という感じになりますから、後者の方が日本語の感じをよく出していると思います。

★「・・・ということになろう」は will prove to be…とすることも出来ますし、might be seen

as…と言ふことも出来ます。

● 「もし A が…なら、B は…」

二つのものを比較する場合によく用いられるのは If A is,,, then B is[might be seen as…] という形です。したがって、ここは If…is elegance, then chic is…とするより、If elegance is…, then chic is…と主語を比較対象にそろえる方が自然な英語になります。